
愛知県立芸術大学創立 50 周年記念国際シンポジウム

「異文化へのまなざし」総括

安原雅之 愛知県立芸術大学音楽学部教授 (音楽学)

森本頼子 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

1. シンポジウムの概要

愛知県立芸術大学創立 50 周年記念国際シンポジウム「異文化へのまなざし Insights into Other Cultures」は、音楽学部音楽学コースと美術学部芸術学専攻が共同で企画し、2016 年 9 月 23 日から 24 日にかけて本学で開催した。シンポジウムでは、本学と、協定校の 3 つの大学の研究者が一堂に会し、研究発表やさまざまなコンサートを行った。

研究発表のセッションには、本学の 5 名の研究者に加えて、協定校の 3 名の研究者が登壇した。パリ＝ソルボンヌ大学からはマルク・バティエ教授、台南芸術大学からは蔡宗徳教授、ミラノ大学からはロッセッラ・メネガッツォ准教授を迎えた。さらに、博士後期課程を修了し、博士号を取得した実技系の若手研究者が、レクチャーコンサートとアフタヌーンコンサートを行ったほか、本学所蔵の鈴木政吉 1929 年製手工ヴァイオリンを使用した特別コンサートを行った。

2. シンポジウム開催に至るまで

本シンポジウムの企画が持ち上がったのは、2014 年のことであったため、足掛け 2 年以上が準備に費やされたことになる。企画立案は音楽学コースと芸術学専攻の専任教員 5 名が中心となっており、そこに音楽学コースの卒業生で非常勤講師の森本頼子、深堀彩香、七條めぐみの 3 名を加えた事務局が組織された。音楽美術の垣根を越えた企画であること、研究発表に加えコンサートも含む複雑なプログラムであること、招へい研究者とのやり取りを伴うことなど、さまざまな点で多くの苦労があったものの、無事に開催にこぎつけることができたのは、事務局スタッフの努力に負うところが大きい。

開催に向けて、さまざまな広報活動も行った。チラシの配布に加え、大学ホームページ、音楽学コースホームページ、フェイスブック等によるウェブ上での広報活動を展開したほか、2016 年 9 月 12 日には、名古屋栄中日ビル 1 階ロビーでプレコンサートを行い、広くこの催しをアピールした。また、中日新聞 (9 月 13 日夕刊) と朝日新聞 (9 月 14 日朝刊) に、シンポジウムの紹介文が掲載されたほか、NHK のテレビ番組「おはよう東海」(9 月 23 日) で、シンポジウム開催が告知された。

3. シンポジウム当日の様子

シンポジウム初日はあいにくの雨模様となったものの、2 日間を通じて、延べ 500 名の来場があった (入場無料)。本学の在学生や卒業生に加え、一般客や、全国の教育機関の学生および研究者など、幅広い客層が来場したことは喜ばしいことであった。また、来場者向けのアンケート

トには、シンポジウムについて好意的な感想が多数寄せられた。

研究発表の3つのセッションは、演奏棟大演奏室 A で行われた。セッションによっては、用意しておいた椅子に座りきれず、立ち見客が出るほどの盛況ぶりをみせるものもあった。招へい研究者の研究発表はいずれも英語で行われ（日本語通訳つき）、本誌の報告にある通り、いずれもきわめて興味深い内容であった。各セッションの最後に設けられた討議の時間には、研究者同士による活発な議論が繰り広げられたほか、フロアからも多数のコメントや質問が飛び交い、異文化理解をめぐる有意義な意見交換がなされた。さらに、セッション終了後も、多くの来場者が発表者に個別に質問する姿が見受けられ、研究発表の反響の大きさがうかがえた。

また、4つのコンサートは、2013年に完成した室内楽ホールで開催された。いずれのコンサートも、「異文化へのまなざし」というテーマに演奏を通じてアプローチするものであり、バラエティに富んだ内容となった。コンサートには、招へい研究者も聴衆として参加してもらい、コンサート終了後には、若手研究者の研究や演奏に対して、個別に有益なアドバイスが与えられた。

さらに、シンポジウム1日目の閉会后には、演奏棟1階ロビーにて、レセプションが開催された。レセプションには、招へい研究者、本学研究者、本学理事長をはじめとする職員および関係者ら約40名が参加し、さまざまな言語が飛び交う国際的な雰囲気の中かで、有意義な交流が行われた。

なお、シンポジウム会期中には、演奏棟2階ロビーに、来場者のための休憩スペースが設けられ、コーヒーや紅茶、茶菓子などがふるまわれた。この休憩スペースには、研究発表やコンサートの合間に多くの人々が訪れ、交流する場になった。また、来場者には、シンポジウムのプログラムに加えて、配布資料を持ち運ぶためのノベルティーバッグが無料で提供された。これは、本シンポジウムのために、本学美術学部デザイン専攻の三嶋さつきさんにデザインしていただいた特注品である。こうしたもてなしに、来場者からは喜びの声が多く聞かれた。

また、2日間のシンポジウムでは、本学博士前・後期課程の学生らが招へい研究者の通訳を務めたほか、学部生および博士前・後期課程の学生がスタッフとして、シンポジウムの運営に携わった。内容盛りだくさんで複雑なプログラムであったのにもかかわらず、すべての学生が懸命に仕事に取り組み、シンポジウムを成功に導いてくれたことは特筆に値する。

4. おわりに

以上のように、本シンポジウムでは、本学と協定校の研究者が、それぞれの研究における異文化とのかかわりについて語り、実演することにより、音楽・美術研究における異文化理解のダイナミックな相互作用を浮き彫りにすることができた。このシンポジウムが一つのきっかけとなり、本学と協定校との交流がさらに活性化することを願いたい。また、本シンポジウムは、本学の教員、職員、卒業生、在学生在が一丸となって開催したという点で、本学の創立50周年を飾るにふさわしいイベントになったといえるだろう。

最後になったが、本シンポジウムを開催するにあたってご支援・ご協力をいただいたすべての皆様に感謝申し上げたい。とりわけ、公益財団法人大幸財団からは、「研究機関の国際交流特別助成」をいただいた。厚く御礼申し上げます。

23日

13:00 開場 13:30 開演
13:45～研究発表 第1セッション
マルク・パティエ(パリ＝ソルボンヌ大学教授)
"Studying Japanese Electroacoustic Music: a View from Paris
(日本の電子音楽研究——パリからの視点)"
井上さつき(本学音楽学部教授)
「日本のヴァイオリン王 鈴木政吉」

16:15～レクチャーコンサート1
「実験工房の作曲家たちによる東洋の影響——フルート作品を中心に」
丹下聡子(フルート)、内本久美(ピアノ/本学音楽学部准教授)、
成本理香(作曲とレクチャー)
武満徹:《巡り》——イサム・ノグチの追憶に
福島和夫:独奏フルートのための《深》
福島和夫:アルト・フルートとピアノのための《エカーグラ》
瀬尾謙二:《舞鶴 II》～アルト・フルート(または能管)のための
成本理香:新作初演

17:30～特別コンサート
「愛知芸大所蔵 鈴木政吉1929年製手工ヴァイオリンによる特別コンサート」
柳山建志(ヴァイオリン/本学音楽学部准教授)、江川智沙穂(ピアノ)、
井上さつき(ミニレクチャー)
ヒンデミット:ヴァイオリン・ソナタ 二長調 作品11-2
ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第9番 イ長調(クロイツェル)



異文化へのまなざし

愛知県立芸術大学創立 50 周年記念
Commemorating the 50th Anniversary of Aichi University of the Arts

国際シンポジウム
International Symposium: Insights into Other Cultures

■日時: 9月23日(金)、24日(土)
■場所: 愛知県立芸術大学
演奏棟大演奏室A、室内楽ホール

※申し込み不要、入場無料、ただし、席数に限りがあります。
※未就学児の入室はご遠慮ください。
※内容が変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

愛知県立芸術大学と、本学の協定校である3大学(パリ＝ソルボンヌ大学、台南芸術大学、ミラノ大学(協定締結準備中))の研究者が一堂に会し、「異文化へのまなざし」をテーマに、音楽・美術にかかわる研究発表およびレクチャーコンサート等を行います。

24日

9:30開場 10:00開演
10:00～研究発表 第2セッション
蔡宗雄(台南芸術大学教授)
"Transculture and Identity: Historical and Social Environment of Chinese Indonesian Wayang Potehi (トランスカルチャーとアイデンティティ——中国＝インドネシアのファン・ポテヒの歴史的・社会的環境)"
増山賢治(本学音楽学部教授)
「第二次世界大戦前後の日本映画から見る中国音楽について」
安原雅之(本学音楽学部教授)
「19世紀のロシアで編纂されたロシア民謡集について」

14:00～アフタヌーンコンサート
「歌曲にみる異文化へのまなざし——H. ヴォルフの歌曲を中心に」
高木彩也子(ソプラノ)、青木園恵(ピアノ)
シューベルト:ズライカI
メンデルスゾーン:歌の翼に
ヴォルフ:《スペイン歌曲集》《イタリア歌曲集》より抜粋 他

14:45～研究発表 第3セッション

ロッセッラ・メネガッツォ(ミラノ大学准教授)
"150th Anniversary of Diplomatic Relations between Italy and Japan: the Role of Italian Photographers in 19th Century Japan (イタリア日本国交150周年——19世紀日本におけるイタリア人写真家の役割)"
高梨光正(本学美術学部准教授)
「大正期の日本人が憧れた西洋美術」
本田光子(本学美術学部専任講師)
「海を越える(琳派)」

18:10～レクチャーコンサート2
「フランス人音楽家アンリ・ジル＝マルシェックスと日本文化」
白石朝子(ピアノとレクチャー)、河合玲子(ソプラノ)
大澤壽人:《丁丑春三題》
ジル＝マルシェックス:《古き日本の二つの映像》より《出雲の秋月》
ジル＝マルシェックス:《芸術者の七つの歌》

チラシ(表)

〈招聘者〉



マルク・バティエ Marc Battier

1970年以来コンピュータ音楽と深く関わって来た電子音響音楽の作曲家・音楽学者。パリ・ソルボンヌ大学教授、MINT(電子音響音楽研究)部長。音楽学者としては、電子音響音楽とコンピュータ音楽の歴史研究の第一人者で、作曲家としては、彼の作品はヨーロッパ諸国、日本、中国、北米など、各地で演奏されている。1979～2002年にかけて、パリのIRCAMでライヒ、ブーレーズ、シュトックハウゼン、湯浅譲二など著名な作曲家たちと仕事をした。その後、電子音響音楽研究の学会EMSを立ち上げ、さらに、アジアの電子音響音楽の国際的な研究機構を創出し、活躍している。



蔡宗徳 Tsung-Te Tsai

イスラム世界の音楽を中心に、中国少数民族(特に新疆ウイグル)の音楽、台湾の伝統的劇音楽の歌仔戲および同地の宗教音楽など、幅広い研究領域をもつ民族音楽研究の第一人者。国立台湾芸術大学民族音楽学研究所教授・所長、中国文化大学中国音楽学科、国立台湾芸術大学芸能研究所を経て、国立台湾芸術大学民族音楽学研究所准教授に就任。2008年より現職。アメリカ・メリーランド大学民族音楽学博士号取得(1993年)。



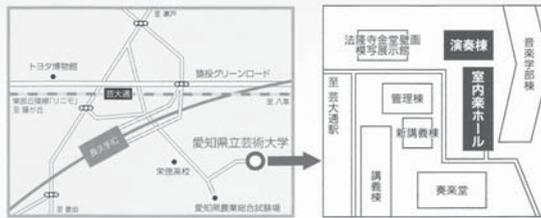
ロッセツラ・メネガッツォ Rossella Menegazzo

ミラノ国立大学文化財・環境学部、東洋美術史准教授。国際北斎センター、ヴェネツィア大学カ・フォスカリ校を経て2012年より現職。博士号(東洋学)。日本の幕末明治の写真と浮世絵の影響関係を研究テーマとするほか、幅広くアジアの古美術、写真やデザインに関する展覧会を担当し、イタリアを中心に東洋美術を紹介する。

出演者

増山賢治(音楽学部音楽学コース教授/民族音楽学)
井上さつき(音楽学部音楽学コース教授/西洋音楽史)
安原雅之(音楽学部音楽学コース教授/西洋音楽史)
高梨光正(美術学部芸術学専攻准教授/西洋美術史)
本田光子(美術学部芸術学専攻講師/日本美術史)
桐山建志(音楽学部弦楽器コース准教授/ヴァイオリン)
内本久美(音楽学部ピアノコース准教授/ピアノ)

白石朝子(大学院博士後期課程修了・博士/ピアノ)
高木彩也子(大学院博士後期課程修了・博士/ソプラノ)
丹下聡子(大学院博士後期課程修了・博士/フルート)
成本理香(大学院博士後期課程修了・博士/作曲)
青木園恵(音楽学部卒業/ピアノ)
江川智沙穂(大学院博士前期課程修了・修士/ピアノ)
河合玲子(大学院修士課程修了・修士/ソプラノ)



問い合わせ先:

愛知県立芸術大学

音楽学コース国際シンポジウム担当
Tel: 0561-76-6298 (研究室直通)
Mail: kengei50shunensympo@gmail.com
URL <http://musicology.aichi-fam-u.ac.jp/>

チラシ (裏)



音楽学コース教員3名(オープニング)



研究発表会場の様子



コンサートの様子



レセプションの様子



受付、休憩スペース



配布プログラムとオリジナルトートバッグ

プログラムデザイン：佐藤直樹准教授

トートバッグデザイン：三嶋さつき氏、監修：森真弓准教授